

年遠くなる戦争の記憶

伝えたい

戦後80年 過去から未来

特別寄稿

毎年、8月になると日本の戦争がよみがえる。メディアは中国に日本のかゝる政府満州国樹立、中国人の土地を開拓した満蒙開拓団についての説明も詳しく報道する。

日本と中国の戦争が拡大された「盧溝橋事件」。中国軍が首都とした南京の日本軍占領。南京での中国住民殺害。太平洋戦争の真珠湾攻撃。米軍が反攻作戦を開始したガダルカナル。広島、長崎への原爆投下などが映像と共に報道される。沖縄では45年6月

23日、沖縄に駐留していた32軍牛島満司令として組織的な沖縄戦終了の日を慰霊の日とする。その時期になると沖縄の新聞は沖縄戦で、南洋群島での日本住民の被害などを体感しながら加えて詳しく書く。

ベトナム、カンボジア、ラオス、ボスニア、アフガニスタンの戦場を撮影して、戦争を理解する基本は日本が関係した日中戦争、日米戦争の原因を知ることと思っている。しかし

若者たちが日本の戦争について詳しく報道される6月、8月を見ているか疑問に感じている。

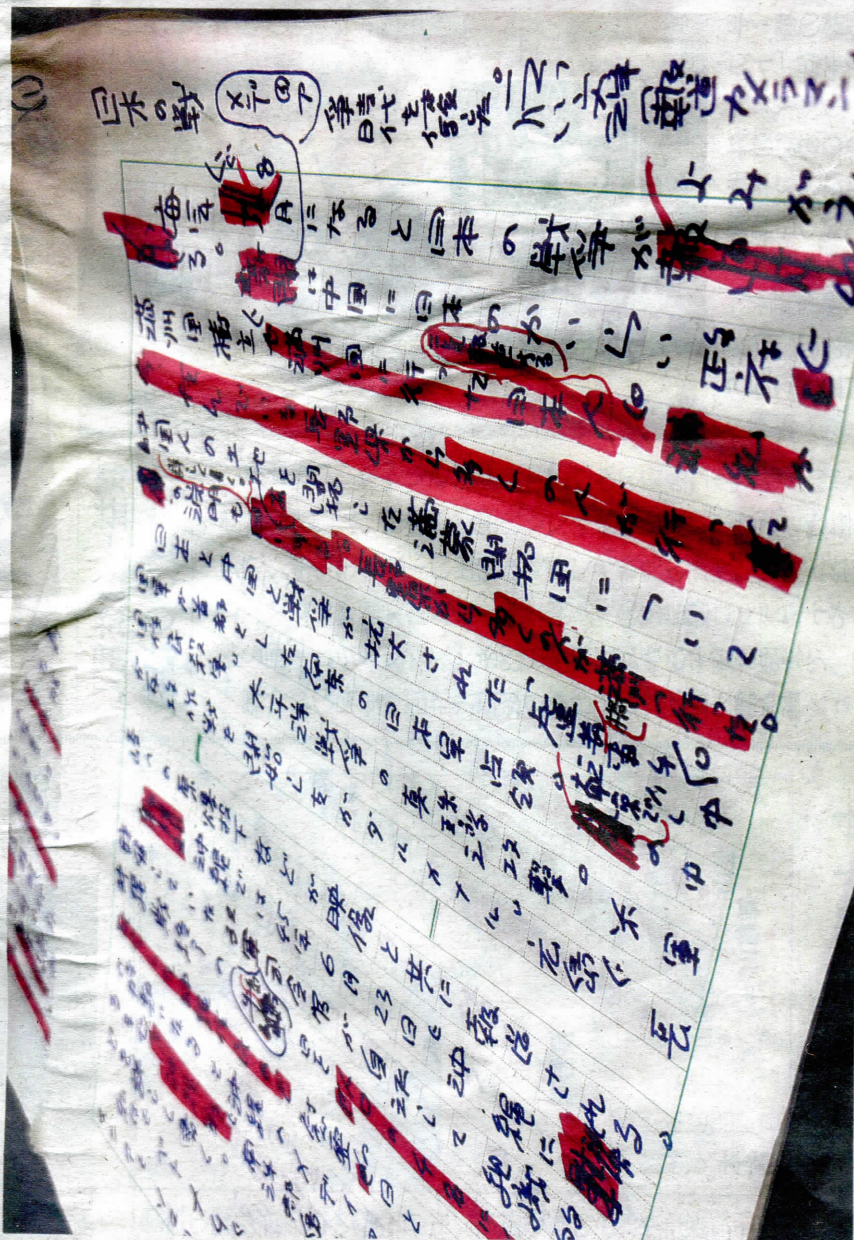
沖縄の辺野古新基地建設。国島、石垣島、勝連半島の基地反対デモでは、若い世代は非常に少なかった。60年、対蘭戦争では連日、国会開会したが、ヘルメットをかぶった学生たちが大勢参加していた。1月、米原子力空母エンタープライズ佐世保入港反対闘争があった。学生と警察機動隊の衝突は激しかった。

沖縄で大学生のひとり、古の座り込みに参加する活動と見られ就職に影響を与えた。ひとりは前と今では価値観が変わったのではないかと考えた。国策として進められ、反対してもどうにもならぬより勉強するといふ人々もいた。

それでも沖縄では米軍のあり、兵士が動いたり戦場に入っているところを見たり取材して本土に戻ると必ず長野では戦後80年、戦争の記憶が遠くなっていることを感じる。

＝87の原稿

石川文洋さんの直筆原稿



私が見た戦争

石川文